

陳橋駅先生との会見記

太田 幸男

我々東洋文庫で『水経注』を講読している者のうちの一〇名は二〇〇九年八月二五日〜三〇日、中国の上海・杭州・紹興を訪問した。その主目的は『水経注疏』（江蘇古籍出版社刊）の復校者であり、現代中国での『水経注』研究の文字通りの第一人者である陳橋駅先生にお目にかかり、『水経注』に関する様々な事実や先生の研究歴等を直接うかがうことであった。参加者は以下のとおり。

池田雄一、太田幸男、多田狷介、藤田忠（以上東洋文庫研究員）、石黒ひさ子、市来弘志、兼平充明、高津純也、村松弘一、山元貴尚（以上研究協力者）

今回の訪問にあたっては、李曉傑氏（復旦大学歴史地理研究所教授）と呂静さん（同文物与博物館学系副教授）に大変お世話になり、ともに杭州・紹興へは我々と同行いただいた。李氏は陳先生と懇意にされていたとのことで、会見日時や先生からうかがいたい内容等の調整をお願いし、呂さんには各地での我々の宿舎の手配や復旦大学での学術交流、陳先生

と我々との会見での通訳等で御尽力いただいた。

我々一行は八月二五日夜刻上海に到着、翌日午前は復旦大学歴史系において、お互いの機関の状況や研究内容等の交流をおこない、書庫、資料室等の見学のうち、池田雄一氏による講演「簡牘中所見的律令―睡虎地秦簡・龍崗秦簡・張家山漢簡」(譚其驥歴史地理講座)があった。夏休み中にもかかわらず、大学院生を主とする二〇名ほどが熱心に聴講し、数々の質問も出されていた。

午後は列車で杭州に向かい、当地で一泊。翌日午前、あらかじめ李氏を通して連絡してあったとおり、浙江大学にほど近い陳先生宅(マンション一階)に向かった。朝の電話連絡のとき、先生の最愛の奥様が一ヶ月ほど前に他界され、やっと諸整理がついたばかりであることを李氏をはじめ我々一同がはじめて知り、不躰な訪問になってしまったかな、と案じたが、八八才(当時)の先生は明るく元気な声で我々を迎えて下さり、一安心した。しかし、右手が包帯でぐるぐる巻きになっており、数日前に階段で転べたとのことだった。教えてほしいことは山ほどあったが、あまり長居はできないな、と思いつつも、先生の会えて嬉しいという大声につい甘えて、二時間を超える会見となった。

陳先生は広い机の上に話の内容に関わる書物・地図・写真等をいっぱいならべて、それらを必要に応じて示しながら話をされた。『水経注』および『水経注』研究についての話の内容の前に、先生の個人にかかわる種々のことをまとめて記しておこう。

陳先生はいままで五回来日されたことがある。日本の各地で交流や講演に努められたが、その他にも、アメリカ、

カナダ、ブラジルでも講演や講義をされてきた。英語に堪能であり、また奥様が日本語が上手だったので、国際交流に大変プラスになったようである。日本の研究者では斯波義信氏を阪大に訪ねて以来親しくなり、英語で自由に会話できたことを喜ばれていた。斯波氏が東洋文庫理事長をなさっていたことにより、東洋文庫に一層の親近感をもつようになった、ということであった。東洋文庫には何度も足を運ばれ、書庫は丁寧に御覧になり、必要な文献の閲覧もされたようである。その他、森鹿三、三上次男、大庭脩、藤善真澄等の諸氏とも交流が深く、後述するようにこのことが先生の『水経注』研究に大変役立つたとのことであった。

陳先生は生まれ故郷の紹興をこよなく愛され、杭州よりずっと風光明媚な所だと盛んに自慢され、先生も執筆等で出版に協力された書物で、紹興を学術的に紹介した邱志栄『紹興風景園林与水』（学林出版社刊、二〇〇八年）を数冊我々に寄贈して下さいました。

陳先生は四人のお子様と多くのお孫さんに恵まれているが、カナダやスウェーデン等外国に居住している人が多く、また研究者になった人も多く、中国には多くある「研究者一族」だなあ、と感じた次第である。

さて肝心の『水経注』および『水経注』研究についてであるが、会見の二ヶ月ほど前に、我々がうかがいたいことを大きく四点にまとめて先生にお送りしてあった。それは、

- 一、酈道元の『水経注』と現代地理学との接点についての先生のお考えをお聞かせ下さい。
- 二、現在、『水経注疏』の刊本は a 北京本（科学出版社刊、一九五七年）、b 台湾本（台湾中華書局刊、一九七二年）、c 段熙

仲点校・陳橋馭復校本（江蘇古籍出版社刊、一九八九年）、d『楊守敬集』本（湖北人民出版社・湖北教育出版社共同刊、一九九三年）（以上初版刊行順）の四本がございますが、特に先生が復校されたc本と関連して、b本やd本についてはどのようにお考えですか。

三、『水経注疏』復校に際して、先生が主として御利用になった地図はどのようなものですか。『楊守敬集』第一三冊によると、湖北省図書館には楊守敬が『水経注疏』を著述する際に参考にした地図の三〇幅がある（五三八頁）とのことですが、この具体的な内容はどのようなものですか。またこれは公開されていて、我々でも閲覧できますか。

四、楊世燦・熊茂洽著『水経注疏三峡補注』（湖北人民出版社刊、一九九三年）が『楊守敬集』第一三冊の王永瑞「集末附記」に引かれています。我々は見ていません。両著者は楊守敬・熊会貞の子孫のようですが、これらの方々をふくめた楊・熊両氏の後裔について教えて下さい、というものであった。

会見では、これらすべてについて、いちいち具体的に返答いただくことはなかったが、我々の知見しない重要な他の事実とともに、順不同ながら様々な話をうかがうことができた。ここでは会見の時に録音したテープを起こした石黒ひさ子さんの記録から主要部分を摘録する。なお文中の（ ）内の文言は石黒さんと太田が補充したものである。

〔先生の著作を含む最近の『水経注』関係書について、陳先生が机上の書物を示しながら〕

陳…これは私の最新の『水経注』についての著作です（『水経注校證』中華書局刊。二〇〇七年に出版し、翌年再版が
出ました。サインをして東洋文庫に寄贈します。

多田…この本は日本にも入っております。

陳…この本は『水経注疏』（江蘇古籍出版社刊）より優れているとも評価され、評判はよいものです。こちらは『水経注』
の簡体字本です。二〇〇一年に出版されました。『水経注』は文系の人だけでなく、理系の人にも必要な資料ですが、（理
系の）学生は繁体字だとよく読めないのです。簡体字で出版したのです。四部備要（武英殿）本を底本としています。

李…最もよく使われる版本ですね。

陳…こちらの『水経注』は台湾で出版されたもので、川ごとに分冊した『水経注』です。

多田…注音字母ですね。

陳…台湾の三民書局の出版で、ここからは今年も私の『水経注擷英解読』が出ます。

李…先生の全集が北京で出版されるそうですが。

陳…人民出版社から出版予定です。何冊本になるかはわかりません。

池田…北京の解放軍の学校の先生が『水経注疏』の簡体字のものをインターネット上に公開していて、自由に見るこ
とができます。先生が復校された『水経注疏』をもとにしているということですが、『水経注疏』の簡体字本は出版さ
れているのですか。

陳：インターネットは使っていないのでわかりません。

李：ネット上のは自分で簡体字を入力した人がいるのでしよう。現代語への翻訳もありますね。

陳：これは山東画報出版社から出た『水経注図』です。倉庫から発見された版本で、出版にあたっては相談を受けました。

多田：これは日本の本屋さんでも買えます。

陳：そうですか。でもこれは良くなかったですね。編集がよくなって、間違っている部分が多くなります。こちらは中華書局で新しく出版された『合校水経注』です。これは編集が良いです。

李：担当は北京大学出身の秦漢史専攻の王勗さんという若い女性です。

陳：私の『水経注校證』も彼女が担当でした。

〈陳先生の全著作、年譜等について〉

陳：これは私の『水経注』についての論文集（『水経注研究』）です。第一集、第二集、第三集（これのみ『酈学新論』と題す）、第四集までです。

李・呂：みなさん全部まとめて写真に撮っておくといいでしょう。

李：最新の論文集（『水経注論叢』）はみなさん持ってきておられますよ。

陳：これは歴史地理学者について一人一冊出版しているものです。私のも計画はあるんですよ。まだ生きてますけ

どね。

李・呂…長生きしてください。先生は国宝ですからね。

多田…最新論集の巻末の年譜には先生の著作がもれなく掲載されているのですか。

陳…この本の年譜は編集の人が作ったもので、完全ではないですね。詳しくないところがあります。

〔『水経注』の諸本について、楊守敬・熊会貞について等〕

陳…楊守敬のことについてはこの『酈学札記』（上海書店出版社刊）に詳しいことが書いてあります（『湖北酈学家』等）。楊守敬と熊会貞はどちらも湖北省の人です。楊守敬の学術年譜については私の書いた論文がありますのでコピーを差し上げます（『従商、入仕、做学問——読『楊守敬学術年譜』——』、『学术界』第一一五期、二〇〇五年）。台湾出版の楊熊合撰本は関西大学の藤善さんから頂いたものです。当時は台湾との交流がなくて、入手できませんでした。全部で一八冊あります。さて、胡適が全祖望の本は偽物であるとしましたが、天津の図書館でこの版本が見つかったのです。その胡適についてですが、こちら（『胡適手稿』）は胡適の奥さんが出版したものです。三〇冊あります。中国（大陸）で所蔵しているのはおそらく私だけでしょう。

李…日本にはありませんね。台湾の胡適紀念館で影印したものです。

陳…さて、前述の天津で発見された全祖望本を見て、私の感想を書いた文章もあります。「酈学を修めて長くなりませんが、この本を見るのにこんなにも遅くなったことは悔しくもあり、また喜びでもあります」と書きました（『論』『水経

注』的版本」、「水経注論叢」所収、当該箇所は二一九頁）。この天津の（全祖望の）版本を出版するには大変なお金がかかりました。影印で六冊あります。

それでは『水経注疏』の話をしましょう。『水経注疏』の版本で最も古くから知られていたのは段熙仲さんが（底本に）使った北京の版本です。それには意味の通じないところが沢山あり、間違いもとても多いのです。その後台湾の楊熊合撰本を日本で見て、それから京大の人文研で森鹿三先生から（日中戦争時に）中国で写させたという稿本を見せてもらいました。それは普通では知られていないもので、日本ではじめて見たのです。これらを見た後に、私は『中華文史論叢』の一九八四年のものに「関于『水経注疏』不同版本和来歴的探討」（前掲陳橋駅復校『水経注疏』下冊の巻末に収録）という文章を書きました。京大で『水経注』の研究をしていたのは、森さんの先生の小川琢治さんと森さんでした。私はこの論文を見て、段（熙仲）さんが台湾に熊会貞の本（楊熊合撰本）があることを知ったのです。私とは面識がなかったのですが、一緒に『水経注疏』の仕事をしないかと誘われたのです。当時私は海外の講演などで忙しくて、とてもお受けできず、お返事できずにいたのですが、段さんの息子さんが車を運転して出版のための原稿を運んできたのです。それで江蘇古籍出版社版の序文は私に書くように言われました。段先生は私よりずっと歳上ですから、出版するときには亡くなっておられ（享年八八歳）、出版した書物を見ることはできませんでした。生前に私が『水経注疏』の編纂に加わってとても喜んでくださいました。段さんは私の尊敬する方です。『水経注』研究の大先輩です。森鹿三さんの『水経注』訳（『中国古典文学大系』二二、平凡社刊、一九七四年）については、私は書評を関西大学の史学の雑誌に発表しま

した（『史泉』五七号、一九八二年）。これを書く時に台湾の本（楊熊合撰本）を知ったのです。

池田：『楊守敬集』の『水経注疏』にはどのような評価をされますか。

陳：その本は私は見えていません。本も持っていませんので。

李：『楊守敬集』は湖北の人たちが編集したのではないですか。

陳：では地図の話に参りましょう。楊守敬の『水経注図』は文化大革命の前までは私も所蔵していましたが、文革でなくなってしまう、その後はもっていません。その後は色々な地図を利用していますが、特定のものはありません。

太田：楊守敬が『水経注疏』執筆に利用した湖北省図書館所蔵の地図は、御覧になったことがありますか。

陳：楊守敬が利用した八〇枚の地図は武昌の図書館（湖北省図書館）と武漢大学で探しましたが、見つかりませんでした。文化大革命の後、地図はばらばらになってしまったのでしよう。現在『水経注疏』の再版の仕事をするなら、地図を探すことができるかもしれない。北京の図書館には関連する地図があるようです。

〈陳先生の研究の動機や苦勞等〉

多田：『水経注』を勉強されるようになった理由や研究のご苦勞などをお伺いできますか。

陳：それについて書いた文章はこの本（『水経注論叢』）の中にあります（同書中の「我読『水経注』的経歴」等）。

〈楊守敬の子孫たち〉

陳：楊守敬の子孫についてですが、この本（『水経注疏補』、未刊、後述）が楊家の方で、楊守敬の孫の孫にあたる楊甦宏

と、楊世燦、楊未冬という方が著者です。こちら（楊世燦）が一代前にあたります。楊甦宏はうちによくやってきます。彼はウクライナのキエフ大学卒業で、やはり地理学の勉強をされましたが、歴史地理学ではなく、現代の地理学です。それで楊守敬の『水経注疏』を現代の地理学の角度から補注を行なおうとされているのです。楊守敬は現代の地理学については知らなかったのですから。

李..その本は出版されたのですか。

陳..まだ出版予定で、人民出版社からです。ここに巻一から巻一〇まであります。この方は帰国されて、いま（杭州にある）浙江電子工業大学の教授をしています。

話は尽きなかったが、先生のお疲れも案じられたので、最後に一同で写真を撮り（本書巻頭の写真⑩）、今後もお元気で活躍されることを念じて昼前に先生宅を辞去した。そのあと浙江省博物館を參觀したのち、紹興に向かった。陳先生の故郷で準備中とうかがった陳橋駅紀念館を見たかったのである。

翌二八日午前、まず紹興市城市建设檔案館を訪れ、館長の屠劍紅さんから紀念館建設の概要をうかがった。陳先生は在世中であるが、紹興の誇る世界的な学者で文化人でもあるので、後世の市民、特に若い世代の人々にその業績を広く知らせるために建設する、とのことであった。屠さんの案内で建設中の紀念館を見学した。住宅地のまん中のかかなり広く古い二階建ての民家を改築中であり、裏には紹興特有の疏水が流れていた。そして一帯が紹興市によって古い街

並み保存地域とされているとのことであった。ここには陳先生の著書や論文、研究に使った文房具や机、椅子の他に日用品も展示し、家族の方々も含めた諸写真を集め、将来は全蔵書もここに収められるようである。紹興を旅行する人は、現在すでに開館されているとのことなので、ぜひ一度立ち寄ることをおすすめしたい。

当日中に上海に戻り、二十九日は参加者各自で上海博物館、書店等に行き、最新の展示物を調査したり、今後の研究に必要な書物を求めたりし、翌三〇日に帰国した。

(本文作成には石黒さんの他に、李曉傑、呂靜、池田雄一、小嶋茂稔、多田狷介各氏の御協力を得た。)

附：陳橋駅先生『水経注』研究著作目録

『水経注研究』、天津古籍出版社、一九八五年

『水経注研究』二集、山西人民出版社、一九八七年

『酈道元与水経注』、上海人民出版社、一九八七年

『水経注疏』(上中下冊)、江蘇古籍出版社、一九八九年、一九九九年再版

『水経注』(武英殿本)、上海古籍出版社、一九九〇年

『酈学新論—水経注研究之三』、山西人民出版社、一九九二年

陳橋駅先生との会見記

太田

- 『酈道元評伝』、南京大学出版社、一九九四年、一九九七年再版
- 『水經注全記』（無原文本）、山西人民出版社、一九九五年
- 『水經注全記』（上下冊、附原文本）、貴州人民出版社、一九九六年
- 『水經注校釈』、杭州大学出版社、一九九九年
- 『酈道元』、花山文芸出版社、二〇〇〇年
- 『酈学札記』、上海書店出版社、二〇〇〇年
- 『水經注評介』（『中國典籍精華叢書』第九卷）、中國青年出版社、二〇〇〇年
- 『水經注』（簡体字本）、浙江古籍出版社、二〇〇一年
- 『水經注』一、黄河之水』、台灣古籍出版有限公司、二〇〇二年
- 『水經注』二、汾濟之水』、台灣古籍出版有限公司、二〇〇二年
- 『水經注』三、海河之水』、台灣古籍出版有限公司、二〇〇二年
- 『水經注』四、洛渭之水』、台灣古籍出版有限公司、二〇〇二年
- 『水經注』五、淮河之水』、台灣古籍出版有限公司、二〇〇二年
- 『水經注』六、沔河之水』、台灣古籍出版有限公司、二〇〇二年
- 『水經注』七、長江之水』、台灣古籍出版有限公司、二〇〇二年

『水経注 八、江南諸水』、台湾古籍出版有限公司、二〇〇二年

『水経注図』、山東画報出版社、二〇〇三年

『水経注研究』四集、杭州出版社、二〇〇三年

『水経注校證』、中華書局、二〇〇七年、二〇〇八年再版

『水経注論叢』、浙江大学出版社、二〇〇八年

『水経注擷英解読』、三民書局、二〇一〇年

注…この目録は会見の時に陳先生が我々に下さったものである。最後の三著書は太田が追補した。